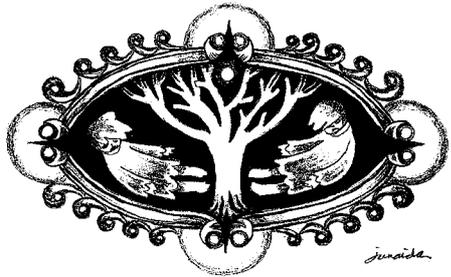


朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のプロローグ 41〉 junaida

短歌時評 「短歌入門書」という信仰 山崎 聡子

短歌を書くかと思つたとき、入門書を読んでみようという人は多いのだろう。「短歌ブーム」の反映か、書店には短歌入門書がいくつも並び、そのどれもが違つた切り口から「短歌を書く」という行為を紐解こうとしている。そのいくつかを読んで思うのは、入門書を書くことは、歌人にとって、短歌に対する信仰の告白のような一面があるということだ。それが如実に表れているのが、服部真里子の近刊『あなたとわたしの短歌教

室』だ。短歌入門書というと、名歌とされる歌を引用しながら、創作のための技術的な指南が開示されるのが王道だ。そこには、各歌人がもつ「歌の善し悪し」についての価値判断があり、おのずと歌人の短歌観が透む。一方、服部の本では「人間はみな、他の誰とも違つて、おもしろい」と説き、誰もが無意識にも持っているあなたらしいおもしろさを引き出すための五つの課題が開示される。同時に、短歌は必ずしも感情などの内的

要請に基づいて書かれなくてもよい、作中主体を作者と分けて考えるなど、創作の場の心理的安全性を保つための考え方が示される。これらは「感情が動く経験をすれば上手な短歌が作れる」という一般論に対する反論であり、服部の短歌に対する姿勢が色濃く感じられる。

二〇〇〇年代初頭、言葉で世界の価値を覆すことを短歌という爆弾で轟かせたのは榎村弘だったが、入門書はときに読者へのアシテーションを含みながら、創作の核心部分を曝け出す。それを信じて、信じなくても、読者は手探りで自分

「百人一首バトル」 5人の歌人(栗木京子、穂村弘、佐藤弓生、千葉聡、石川美南)がそれぞれのテーマに添って百首選んだアンソロジー。(書肆侃侃房・2310円)

梅崎実奈編「猶ほ硝子のフリルで踊る」 「幻想」をテーマに、詩歌の棚を担当してきた書店員が編んだアンソロジー。147首を収録。(河出書房新社・2530円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかが1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから

失職にも手を挙げて歓喜する人が居るらしい国会議事堂 (宇陀市) 赤井 友光
 どの党も減税を言う選挙戦我らを甘く見てはいないか (観音寺市) 篠原 俊則
 我が国を五十二番目の州にすると言つてくれれば目が覚めるのに (半田市) 石橋美津子
 羽ばたかず風に浮かんだ鳥たちがゆるりと移る琵琶湖の東 (京都市) 後藤 正樹
 除雪車は行きつ戻りつ空港のライブカメラの無音の中を (高岡市) 池田 典恵
 小文字一つ間違え送れぬメールなり文字汚くも届く郵便 (鳥取市) 山本憲三郎
 握手では想ひ溢れてしまふからハイタッチして出づる父の病室 (堺市) 中井 光世
 安青錦は国を背負っているなんて言われなくなる日が来るかい (出雲市) 塩田 直也
 背中からどんなに強く抱かれても凍った胸はあなたを拒む (関市) 薫田 泰子
 口遊びまるだけえびすにおしおしけぞろ歩き(の)聖町通 (神戸市) 喜多 清

【評】赤井さん、解散すなわち失職のはずなのに、それに万歳をする人たちがいるという不思議。篠原さん、まことに国民を見くびっているとしか思えない公約がどの党からも。石橋さん、それもあるかも知れないと思ってしまうところが怖い。

にぎやかに孫をお風呂に入れたの背に銃創残る祖父あり (北九州市) 粟屋 融子
 ささやかなの幸せをよに散っている あなたは逝きぬとも静かに (津市) 亀井百合子
 みずうみは盲目ですか太古より波にたためた月をうつすも (春日部市) 宮代 康志
 じりじりと列が進むに従って表情を変えるコッホの自画像 (青屋市) 福本 路子
 何万の無言抜けゆくゆづれに改札口という孤島あり (垂水市) 岩元 秀人
 骨組みに政治家の顔設置され選挙権のない僕は見ている(北本市) スヒガ・ファブリツィオ
 この世とは正義ならけならぬ個々に信じる白いはすの雪 (横浜市) 友常 甘酢
 目はテレビ心は神に向いてい腹股筋の手術を控え (横浜市) 吉村 一
 巻貝の螺旋を解いてゆくようにほつりほつりと告げた身の上 (大阪市) 栗子 守熊
 AIに「人間ですか」と尋ねられ私の中でうづく猿人 (東京都) 椿 泰文

【評】一首目、戦争の傷を抱えて生きた背だ。二首目、穏やかな最期に二人の關係の幸福が香る。三首目、月を何度も映しながら見えていないかのような湖の静けさ。六首目、きこえない表現に違和感が伝わる。自分とは何者かという問いだ。

十日目が早朝六時真上飛ぶ火消しのへりは今日も休まず (相模原市) 荒井 篤
 処分するつもり古のお雛様視線が合つて今年も飾る (北九州市) 高丸美津子
 しじ前でおでんを吟味する人を皆でじつと見つめる時間 (横浜市) 宮尾 大地
 保育園ごっこをすれば子等はみな保母さん役に立候補する (横浜市) 毛渥 明子
 一斤の白き焼きたてパンのごと子大をだきて雪道帰る (津島市) 中川 昂子
 大銅を許すマンシオン見つかけて移り来たれば今大だらけ (町田市) 山本喜多男
 こんなにも世に病人が多いと知る朝九時に行く大学病院 (熊本市) 柳田 孝裕
 椅子振子団子帷子螺子螺子これだけあつても少子化進む (八千代市) 井上 正則
 鱈と鯨二つ鍋にて庄内ならふく祭り楽しかりり (横浜市) 白川 修
 自分から賀状じまいをしなくせに今日もおおとポストをのぞく (大阪市) 木村 彰子

【評】第一首、各地で頻発する山林火災。ヘリコプターをクローズアップした映像が印象的。第二首、子供たちも独立して行った後のお雛様、「視線が合つて」が楽しい。第三首、繁盛しているコンビニなのだろう。結句、可笑しい。

日本初女性の首相は支持を得て消えゆく炭火のごとき九条 (福岡市) 夏野いづみ
 母さんは幸せを感じる沸点が低いと子らに褒められ生くる (田村市) 松平 久子
 ハワイからモンゴルそしてウクライナ丸き土俵は地球をつなぐ (豊川市) 石黒 永一
 満面の笑みは見られず安青錦心よきるも戦いの母国 (横浜市) 一石 浩司
 アメリカにメリット無ければ不要と言う国際法も平和の義務も (東京都) 北條 忠政
 手抜き鍋うまいうまいと食べる父帰省のたびに小さくなる背 (長崎市) 小林 祐子
 新聞も読まずにスマホで世の動き知つたつもり(若者の未来 (横浜市) 坪沼 稔
 スマホではなく地図を持ち遍路道歩む男の姿好も (観音寺市) 篠原 俊則
 かの国の旅人減って静まり電車も店も道もトイレも (八尾市) 西口 初栄
 「色あせぬ名局指せた」ひふみんは引退の時強く語りき (横浜市) 滝 妙子

【評】1首目、憲法九条が危ない、と憂慮する作者。2首目、些細なことでも幸せを感じて生きる自分を客観視した歌。3首目、世界各地から強い力士を呼び寄せる丸い土俵は、まるで国際交流の場。10首目、棋士・加藤一二三の逝去を惜しむ。

永田和宏選

川野里子選

佐佐木幸綱選

高野公彦選

風信